

# 令和4年度「ながの未来トーク」集約表

開催日：令和4年11月19日（土） 午後2時30分～4時30分 会場：篠ノ井総合市民センター多目的ホール  
地元参加者：100人（男性84人、女性16人）  
市側出席者：荻原市長、下平企画政策部長、横田建設部長、藤澤教育次長、村上危機管理防災監 青木篠ノ井支所長  
集約担当：篠ノ井支所  
会議形態：活動発表方式

## 【活動発表】

### 朗読劇：「台風災害を乗り越えて」忘れない、あの日、あの時

（体験発表） 「台風災害を乗り越えて」忘れない、あの日、あの時  
（出演者） 信州なでしこ隊・寺子屋ダンディ（14人）、塩崎・東福寺・川柳地域代表  
（進行役） 篠ノ井地区住民自治協議会 地域振興部会長

信州なでしこ隊、寺子屋ダンディが、東日本台風で体験した避難するまでの恐怖、不安や、被災した惨状を見た悲しみ、ボランティア、自衛隊の支援に感謝などを、被災現場、避難所の様子、ボランティア、自衛隊の活動等を映したスライドをバックに、リレー方式による朗読劇に、被害の多かった中央、塩崎、東福寺、川柳の地域代表による体験談を交えて発表

#### 《感想》

内容も非常に示唆に富み、我々も勉強しなければならない点がたくさん盛り込まれており、改めて噛みしめたいと思っている。市では令和元年の台風災害の経験を踏まえ、令和2年度に検証報告書をまとめ、昨年度は避難所の開設マニュアル、運営マニュアルを策定しており、一歩ずつ、取り組みを進めているところである。また、信州大学と一緒に、災害の記録をまとめていく「デジタルアーカイブ」といった事業にも取り組んでいる。

現在、長野市地域防災計画と水防計画の見直しを進めており、21日からパブリックコメントを行うので、ご意見等をお寄せいただきたい。

市民の生命、身体、財産を守るために最善を尽くす、これが市の責務であるが、行政の対応にも限界がある。引き続き、防災、減災の取り組みに対する篠ノ井地区の皆さまのご理解とご協力をお願いする。

〔村上危機管理防災監〕

## 【自由討議】

### <1 篠ノ井交流センターの分館について>

#### 《意見》

令和3年「長野市公共施設個別計画」で示された、交流センター分館の廃止、譲渡について、分館29館を一律に同様の対応とするのではなく、個々の実態に合わせた対応をお願いしたい。

各地域のコミュニティ施設として、重要な役割を果たしている分館は、篠ノ井地区管内には6分館がある。令和元年度の年間利用者数は3万5,000人に上り、ランニングコストとして年間500万円を要し、コロナ禍により制限制約の運営を余儀なくされた令和3年度でも、年間利用者数は1万8,000人で、コストは年間380万円ほどかかっている。これらの実態を考えると、地域として担うには大きな負担となることが容易に想定できる。さらに、農協との合築も2分館、東福寺、信里もあり、別途協議が必要である。

塩崎分館は、築11年の施設である。ここを拠点に地域活動、サークル活動が活発に行われている。このことを憂慮した塩崎地域委員会は大きな課題として受けとめ、出前講座を受け、昨年度は、塩崎分館を現状維持での継続使用を求める要望書を篠ノ井地区住民自治協議会会長に提出してきたところである。

このように、それぞれの分館ごとに成り立ちも、形態も違いのある中で、当面は現状のまま継続使用の検討を要望するとともに、今後、協議を進める際は篠ノ井地区住民自治協議会が窓口となり、個別、具体的な対応をお願いしたい。

#### 《意見》

各分館が一律に、譲渡もしくは廃止という市の方針の決定であるが、共和地区でも大変な衝撃となっており「どうするのか」と、私も地域の皆さんからいろいろ質問を受けている。分館が地域住民の交流に果たしている役割の大きさ、それが失われることの重大性、こういったことを地域の皆さんはよく理解している。市民の一人ひとりには、自分が住んでいる地域に親しみや愛着、住みよさを感じて、誇りを持つようになること、これが市政の根本的な目的なのではないかと思う。そのためには、その地域に暮らす住民が日常的に交流して、理解を深め合える場があることが極めて重要だと思う。

そうした交流の中で育まれた連帯感、思いやりの心、災害時に被害の拡大を防ぐ、思いがけないような成果をもたらしたというニュースもある。そのような意味で、公民館活動は重要な役割を担っており、分館は各地区の住民交流の活動を支える、無くてはならない施設となっている。

共和分館でも、分館が実施する事業だけでなく、実にさまざまな各種クラブの活動を通じて地域住民の交流が進められている。また、区長会と住民自治協議会の月例の会議場として行政課題や地域の課題への対応協議を行っているほか、多くのボランティア団体の会議や事業活動の場としても活用されている。

こうした場が失われると、住民同士の信頼関係や地域への愛着、一体感、そのようなものが年々希薄になっていってしまうことが危惧される。また、行政を補完する区長会や住民自治協議会の活動、各種団体の事業活動にも大きな支障となることが予想される。

共和分館は、塩崎分館のような新しい施設ではないが、まだまだ10年や20年は十分役割を担っていける。このような機能は、他の施設で簡単に代替できるものではない。これは共和地区だけではなく、どの分館においても全く同様である。

こうした実情を勘案いただき、各分館の存続についてご検討いただくようお願い申し上げます。

## 令和4年度「ながの未来トーク」集約表

### 《回答》

篠ノ井交流センター管内の分館は大変多くの皆さまにご利用いただき、塩崎分館も含め、地域の生涯学習、社会教育活動にとって大変重要な施設であることを理解している。

公共施設個別計画は、単に施設を減らすことを目的としているものではなく、今後の人口減少や少子高齢化などの社会の変化に対応し、将来世代の大きな負担とならないよう、将来に渡る行政コストの軽減を目指したものである。

しかしながら、公共施設マネジメントの取り組みは、施設面積の20%縮減という数値目標がひとり歩きしてしまい、施設廃止ありきの議論ではないかといったご指摘を数多くいただいている。公民館、交流センターの分館、分室を一律に廃止とした方向性についても、さまざまなご意見をいただき、教育委員会として真摯に受けとめている。

市として、改めて公共施設マネジメントの進め方について検討を進める中で、建物の耐用年数や老朽化の状態に着目し、今ある施設を有効に活用する必要があると考え、比較的新しく劣化が少ない建物や、利用度の高い施設については、できるだけ長く使い続けていくことが大切であると考えている。

このような基本的な考え方にに基づき、篠ノ井地区の6分館は、施設ごとに異なる利用状況や老朽化等を考慮し、できるだけ保全を尽くして施設を利用いただくことで、地域の生涯学習活動が後退することのないよう、活動の場をできるだけ長く、できる限り長く確保したいと考えている。

一方、将来世代の負担とならないよう行政コストを軽減していかなければならない課題は引き続き残っており、将来の建物の方向性については、住民自治協議会の皆さまと一緒に知恵を出し合いながら、施設ごとに検討してまいりたいと考えている。また、ご指摘のとおり、JAとの合築施設については、JAの方針も踏まえながら検討する必要がある。

塩崎分館は、平成23年3月完成と新しい施設で、耐用年数も長く残っている。また、その他の分館も含めて、これまでと同様、大切に利用していただきたいと考えている。

今後も、分館については篠ノ井地区住民自治協議会の相談しながら進めたいと考えているのでご協力をお願いしたい。

〔藤沢教育次長〕

『担当課：教育委員会事務局家庭・地域学びの課』

### 【総括等】

#### 《支所長》

信州なでしこ隊は、塾長を中心に積極的に活動されており、皆さま方の計り知れないパワーに感服している。寺子屋ダンディは、会費を徴収せず、経費はその都度決済するとお聞きした。気軽に参加しやすいのでは、と感じる。

朗読劇やスライドで、記憶がまざまざと蘇ってきた。皆さまは大変な苦勞をされたが、その時、私のやっていたことを紹介する。

その時、私は教育委員会の保健給食課であった。学校の体育館が避難所となることから、教育委員会は避難所の担当であった。ここが避難所となる話を聞いて、私は驚いた。避難所がすべて閉鎖となる2カ月余り、避難所は24時間対応しており、交代で管理職は事務室に寝泊まりして、そのほかの職員は避難所に派遣した。

何が大変であったかは食数の把握で、たくさん余っても困るし、足りないともっと困る。また、自衛隊の味噌汁の話があったが、メニューを考え、食材を発注していたのは、私どもでやっていた。

日頃、学校給食を作っているが、気になるのは食物アレルギーである。避難所にも子供がたくさんいるので、特定7品目という症状が重かったり、発症例が多かったりする牛乳、卵、小麦、落花生、蕎麦、エビ、カニ、これについて含まれているか、含まれていないかを表示しようと、安心して召し上がっていただくよう、そのようなことをやっていたのを思い出した。

自由討議の公民館の分館については、使えるものは使っていく、個々の実情に応じて対応していくとの話があり、いい話が聞けたかなと思っている。どんどん利用していただいて、利用率をどんどん上げていくこと、これも大事なかなと感じた。

今後も住民自治協議会の皆さまと連携して、篠ノ井のまちづくりを進めていくのでよろしくご協力申し上げる。

#### 《市長総括》

過去を振り返るのも本当に皆さん辛い思いで振り返られ、この朗読劇にまとめていただいたことに心から敬意を申し上げる。

普段車で通る道、歩く道、それをボートに乗る。こんなことはもう二度とないように、私たち行政としてもこれから堤防の強化や河道掘削、排水機場の整備、遊水池の整備などしっかり進めたい。これも、地域の理解がないと、進むものも、進むべきものも進まないの、皆さまに力添えをいただきたい。国、県とも連携して、これからの防災、減災対策に努めてまいりたい。

分館について、市の公共施設個別計画での施設全体の20%削減というものがひとり歩きをしてしまい、皆さまにご心配をおかけしたことをお詫びしなければならないと思っている。地域の皆さんが積極的に使っていただいているという現状を、私たちがしっかり見ていかなければならないと思っている。さらに、日頃の分館活動、地域の活動、人との集い、そういうものが災害の時に、お互いの連絡体制、協力体制ができるという、先ほどの話のとおりだと思う。こういった地域活動を大切にしながら、これから行政をしっかり進めていきたいと思っている。

これからは人口が減ってしまう社会、税収の伸び悩みも考えなければならない。社会保障関係経費も増大していく中で、これから公共施設をどのように維持していくのかを考えればならず、場合によっては致し方がないという判断も、どこかで、いつかはしなければならぬ時が来るかもしれない。

「もったいない」という言葉が数年前から叫ばれている。「もったいない」という気持ちを大切にしながら、地域の皆さんの交流が深まるような活動を、私たちもしっかり見守っていきたくて思っている。